

【熊本国税局長賞】

持続可能な社会を目指して

南さつま市立加世田中学校

三年 相星 夢凜

日本は、国土の約七割が森林で、世界でも緑が豊かな国だ。昔から木で建物や道具をつくるなど、生活に欠かせない資源として活用してきた。しかし、現在、日本には荒れて元気を失っている森林がたくさんあるという話を父から聞いた。

日本の森林には、自然のままの「天然林」と、人の手で植えられた「人工林」があるそうだ。今から七十年ほど前、資源となる木材を育てるために、たくさんの木を植えて人工林をつくった。しかし、これらが手入れされずに放置され続けて、荒れた森林が増えてしまったのだ。荒れた森林は、太陽の光が地面に届かない。栄養が行き届かない木は、ひよろひよろとして細く、建物や道具の材料として使えない。そのような森林には生き物も住みにくく、土は固くなり、大雨のときに土砂崩れを引き起こしてしまう恐れもあり、多くの問題を抱えている。また、林業に携わる人々も減ってきている。荒れた森林が元気を取り戻すためには、適切な管理が必要だ。間伐、成長した木の伐採、伐採した木の活用、伐採した分の木を新しく植えて育てる、このように循環させることが大切なのだ。

適切な森林の整備、担い手不足、地球温暖化など、様々な課題を解決していくために、令和六年度から国民一人当たり、年間千円を「森林環境税」として徴収することになった。森林の整備は喫緊の課題であり、この税が充てられる事業は、すでに令和元年度からおこなわれている。父は、この春まで管理がされていない人工林を所有している市民に、森林を整備し、循環させながら守っていくための橋渡しをする業務をおこなっていた。それは、人工林の所有者のためだけではなく、森林を守り育てることで、二酸化炭素の削減を目指す、自然災害を防ぐ、資源を有効に活用するなど、持続可能な開発目標として、すべての人や環境を守る取り組みにもなる。様々な目的で徴収、使用される税金は、その時に何が必要かを考えて制度がつくられているのだということを知った。森林環境税は、地域の現状に則した形で使用されるそうだ。

「税金を納めてくれる人にも納得してもらえるように、しっかり目的を果たさなければならぬ。」

と、毎日仕事を頑張っていた父の言葉から、税金は、社会を豊かにするために必要なものだと感じる。税金を使って解決したい課題があつて、納税者がいて、適切に使われるシステムがあることで社会も循環する。

地球温暖化対策、災害対策については、税金を充てて早急に取り組まなければならない深刻な問題である。税金が有効に活用されて、国全体で環境を整えていく必要がある。自分も納税者となったときに、目的とシステムをしっかりと理解して納税したい。